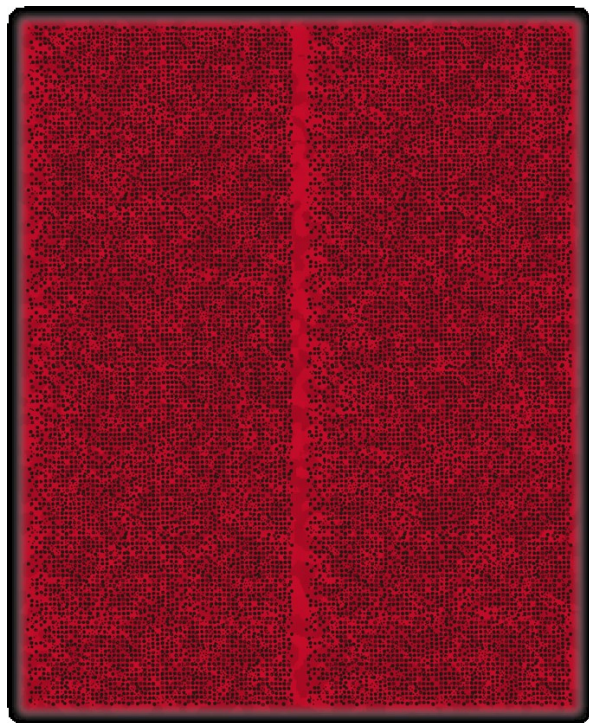


詩誌 立彩

*Rissai: A Journal of Poems*



第 16 号  
2019 年 9 月



目次

関根 全宏	ただひとり	2
	哀歌	4
相澤ゆかり	愛が文学か	6
伊東 友乃	ひとつの悲しみ	8
	すべて置いていく	10
	寂しさは	11
田中 はじめ	重箱 縦横無尽	14
	伯母のつぶやき	16
東野 潤	ロマンティストのうわ言を記録する	20
	それはほんとうに恋なのか	22
	訃報相次ぐ	24
	訣れを告げる	26
	もうひとつの訃報	28
渡辺 信二	もしもローズバドで	30

表紙原画

鈴木 順三

(表紙)	「ある」というまなざしのもとで	1
(裏表紙)	「ある」というまなざしのもとで	2

ただひとり

関根 全宏

わたしはいらない  
どこまでも広がる  
あの空の自由も  
春の眩い余剰も  
わたしはいらない  
偽りの慰めは  
ただひとり には  
似合わないから  
それにきづかず  
きづいていても  
ふりをするのが  
正しいのなら  
いつそ間違っただままでいい  
ほんとうは を  
知っているから

だから この沈黙の暗闇を  
どこまでもひとり  
堕ちていくわたしを  
あなたが最後に  
つかまえて とも  
わたしはいわない

哀歌

関根 全宏

わたしの時間は  
薄情にも  
あなたを置き去りにして  
遠くにわたしを  
連れ去ってしまう  
どこまでも  
離され  
遠く  
遠い  
あの夏を  
何度も繰り返し  
いずれ  
この命も  
消えるときには  
もういちどだけ

聞こえるだろうか  
果てに わたしを呼ぶ声を

## 愛が文学か

相澤ゆかり

あのときから あなたの虜になりました  
人類から見れば

別に 目新しい出来事ではないでしょう  
でも じぶんにとっては  
全く初めての経験でした

揺れるなら 揺れ

抱かれたならば 抱き返して

理性を掻き捨て

激しくも豊かなひと時

あれが永遠であってほしいと願いました

でも 今となっては ほんとうに大事なことは  
そんなことではなかったでしょう



誰かを思うことが　それだけで  
作品となるのなら

わたしだって　愛し続けたでしょう

文学史から見れば　恋愛など

個人的なことです

それがなぜ　わたしたちを揺さぶり続けるのでしょうか

ひとつの悲しみ

伊東  
友乃

ひとつの悲しみが

夕暮れとともにやってきて

時間はずれの

挨拶をしてくる

こちらも挨拶をしかえせば

扉が

あかるく ひらかれる

今日 と言いかけて

昨日 と思いなおし

ゆれていく時間軸には

いつも置きざりの子ら

(笑っているね

笑っているよ)

こぼれていく  
ひかりの粒が  
なだらかな宙を  
かけあがり

出来上がった  
つややかな  
ひかりの筋は  
やはり  
さいしょから  
ひとつの悲しみで  
それは  
まったく  
わたしのものだった

すべて置いていく

伊東 友乃

悲しみの行きどころを

駅のプラットホームに定める

夕暮れはうす青く

上空に流れる雲は早い

吹きぬける風にのせて

ほどける髪のむこう

ガムのへばりついた灰色の平面に

依存してきた悲しみを

置いていかなければならないという

ならねば という

生き残る決意をかたくして

それにともなう

わずかな悲しみも

すべて すべて置いていく

寂しきは

伊東  
友乃

寂しきは耐えていた

花びらのような

絶望のような

のしかかるも重さから

寂しきは耐えていた

彼が傍若無人なふるまいを

彼が神を見つめようと

するとき

寂しきは耐えていた

彼がひとと笑いあうとき

彼が黙々と作業をするとき

寂しさは耐えていた

朝も夕も

晴れの日も雨のけふる日も

寂しさは

いつも彼と

耐えていた

死が彼をむかえにきた

朝

寂しさは

もはや耐える必要が

なくなり

そして

耐える必要はなかったんだと

彼に

優しく言われ

寂しさは  
ようやく安らかに  
死ねた

重箱 縦横無尽

田中 はじめ

みなさん こんにちは

わたしたちジャンジャー族は

狭くも苦しい不幸が大好きで

重箱の隅を誇りとし

好んで満員電車に乗りこんでいます

凱風快晴を知らず 土農工商

徳川 薩長 軍人 特高 米軍 自民と

ニワトリ突つきの順位に従い

隅に縮んで 順に 気を付け 並ぶ

そういう生き方 肩寄せ合って でありまして

これを小さな幸せと言うのでございましょう

一隅を照らす、のですか

われら クリスチャンじゃないんで



まさか あなた B29の再来を願っているとか？

確かにあれは 闇夜を隅々まで照らし

戸籍は みんな 燃えて無くなれ

赤紙もマイナンバーも発行できないように、とか？

ですけど と言いますか ですので たまです

たまですけれど

たまには 重箱の蓋を取り

現実から逃げ 花鳥風月に遊び

陽光に身体を曝したいと思うこともございます

ええ それでも サンショウウオのようなこの顔は 直りませんが

伯母のつづやき

田中 はじめ

わたし 姪のあなたに頼んでおくけど

お墓 要りません 墓無しが 儚いなんて

伯父さんのギャグです

ダンボールで棺を作って

火葬して お骨を粉々に挽き

どこかの空へ撒いてください

空こそ わたしのお墓

青い雲が 墓碑銘

戒名は 時折 大驚が口にするでしょう

食べるのも供養とか

わたしの葬式の精進落としては

どうぞ お楽しみください

笑って踊って 楽しんで

お別れをください

悲しみは わたしだけのものです

死ねば 無 何もありません

今は生きている でも その先は

完全な断絶 完全な無

だから 知っているでしょう？

いいですね 伯父さんがなんと言おうと

決してあの墓にだけは入れないで

ただ思いが残るのは 何度かすれ違い

その後 共に時を過ごしたあの方

せめては あなたとゆっくりにお別れをしたかったけれど

★★★

妻をなを 恋ふるうた

ほんとうに おまえは 死ねば無  
と 思っていたのか  
ほんとうに見えないのか

3年経った今も おれの傍らには おまえがいて  
前よりも 烈しく おれの心を 占めて  
前よりも 激しく 魂を 締め付ける

それは 邪気の 思い込みだと  
いくら 仏壇に 菊を飾っても  
拭えない

未練なのか  
おれもおまえも 成仏できないようだ

★★★

姪より

心からのお願いです

伯父さんが 今でも 仏壇の前で

毎日 手を合わせているのですよ

見えますか

もう隠れるのはやめて 姿を見せてください

ロマンティストのうわ言を記録する

田中 はじめ

そうか 「その人の 美しかった姿

それが一瞬だったとは言うまい

おまえの靴音が おれの身体を震わせ」

いや 「おまえの匂いが おれのこころを騒がし

おまえの声が おれの霊をこの地にとどめ

おまえの姿が おれの魂を大気に融かしてゆく」

それとも 「おまえの肌は おれの憧れ

良し悪しや 正邪を超えて

ただただ それに触れていたい と思う」

ほんとうは 「触れなば

おれが指先から大気に消えてゆく

おれの命さえ奪うのだから」

そうなのですか 「そんな女が

この世にいるかと聞かれたならば

ええ ひとりだけ

たった一人だけいました と答えよう」

ほんとうに 「彼女が去ったあと

この世の錯乱 いかにも激しく

収まる気配がありません」ほんとうに？

でも ほんとうは 自殺未遂で担ぎ込まれた病院で

彼は、三日三晩 うわ言を言い続けた後に

突然、安らかな表情に変わって

この世を去りました

それはほんとうに恋なのか

東野  
潤

すれ違う喪服の女性に

一瞬にして 恋をして 男は 永遠の愛を誓った  
そして 一瞬にして 永遠に別れた

これは 普通に よくある話だ

ただし 世界的詩人になったのは

その男 ボードレルだけだったが

ぼくの場合は 喪服でなくていい

すれ違う若い女性を見れば

優しい人だとすぐに分かる

とりわけ きれいな女性なら

必ず、心優しいはずだから

直ぐに恋をして なるべく近付こうとする



それは いわば 結婚未遂の気持ちです  
追いつけない女  
もう2度とは会えない女

きれいな女性には やはり 間違はなく恋をする！  
わかつてはいる 彼女は 行きずりの女  
すれ違うだけの女 すぐに去り行く女

わかつてはいる  
いや でも 確かに どこかで以前  
会ったことが あるのだから

訃報相次ぐ

東野  
潤

彼女が去ったあと

この世の大気の乱れ いかにも激しく

収まる気配がありません

でもほら あの 緑豊かな草原

牛たちの群れ――

のどかでしょう？

そうか それが

ほんとうに のどかなのか

直ぐに 緑のすべてが枯れ果て

砂漠となるのでは ないか？

彼女が去ったあと

この世の大気の乱れ いかにも激しく  
収まる気配がありません

時を待たず

うなだれ 去りゆく者たち

そして そうかおまえたちも

ついに逝ったのか

そうとしか もう 言えないことが

今のおれたちを物語る

歳のせいではない

訃報が相次ぐなかで

その多さに 鈍感となる時代

訣れを告げる

東野  
潤

6月 雨上がりの山々は  
緑の陰影が濃い

あらゆる葉脈が 太陽に輝き  
生命の流れを 一気に 解き放つ

木々の影が 黒々と また 深々と  
谷間に 魂を 辿って行く

われら いつ 最期の中断を受け入れるのか  
われら どこで 粛々と 全ての断念を可能とするのか

いつたい 何者なので  
われら なぜ ここに至り  
また なぜ ここを去らねばならないのか

あまりにも この緑の陰影が  
くつきりと濃い

もうひとつの訃報

東野  
潤

食事を一緒にしよう

と約束しましたが

ついに果たせなかった

ごめんなさい

あなたがそんな事情だとも知らずに

ドライブでも一緒にしよう

と誘ったけれど

ついに返信はありませんでした

ごめんなさい

あなたがそんな病気だとも知らずに

京都にでも一緒に行きましよう

と打ち込んでみたけれど

ついに送信できませんでした  
あなたがもう

受信できないとも知らず

わたしは あなたのいない世界を

これから 生きねばならない

あなたは今もなお FACEBOOKのなかで  
輝く笑顔を見せていますが・・・

もしもローズバドで

渡辺 信二

生き生きと 激しく つかの間の

関係だった おれたち

その思い出が あの天上と

この地上のあいだに

ひらひらと傾き 落ちて おれたちを手招く

あの 明るい場所のほうでは

太陽がさんと注ぎ

日の目を見なかったおれたちの魂が

銀杏の樹々のあいだから

溶け合う液体の輝きを漂わせる

そうです もしも ローズバドで

わたしの魂よ おれが

おまえに再び出会うなら

この世が終わる



終わるがいい

おれたち 必ず あの生き生きと 優しく  
つかの間の流れを見いだすだろう

そこでは この世の喜びを司る者たちが  
つねに おれたちの祝祭を清め

大気のなかに 据える

明るいサファイアやコバルト カチアン

あるいは 三位一体の触れることがなく

永久の変化の静まることもない

あの透き通る場所こそが おれたちの天上である

そうだ 魂よ もしも おまえが姿を変えて

おれたちに出会うのなら

わたしの魂よ どんな褒貶も

どんな毀誉も ただのそよ風に過ぎず

より高貴な安息所へ

より望ましい中空へと

その場所から おれたちを誘い

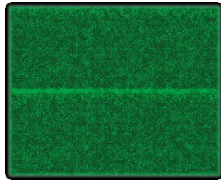
ブラックヒルズの  
黒光りする頂を越えてゆくだろう

2019, 03, 01 より 2019, 08, 15 のあいだに贈られた詩誌

『りんごの木』 51。

『万河・Banga』 21。

『GATE』 28。



詩誌『立彩』第16号 2019年9月10日発行

頒価 300円

編集発行 「立彩」

〒400-8555 山梨県甲府市横根町 888

山梨英和大学人間文化学部 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311